

いのちの運動(ルカ 6:6-11)

聖書のエペソ人への手紙 2:1 には、あなたがたは自分の罪と罪過にあって死んでいた者であると言われています。いくら知識があり IQ が高くてもこのような霊的事実を知らないと、人間の実態について無知な人になり、人生に迷うことになってしまいます。霊的事実というのはどういう内容なのでしょう。人は実は創造主の神様によって神のかたちに造られた者です。唯一たましいのある霊的存在として造られて祝福されました。なのに、この人間が目に見えない霊の存在、悪魔に惑わされて罪を犯して神様を離れてしまうことになり、その結果、罪とサタンの奴隷になり自分ではどうにもならない地獄の運命を抱えて生きることになりました。なので地上にいる間にはいくら頭が良くても自分、また肉、この世という罠にはめられて、宗教、偶像崇拜、占いシャーマン、イデオロギーという枠に閉じ込められて生きることになります。当然、その人は身分そのものが、あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であるといわれている、身分そのものが悪魔の子なので、霊的に参ってしまい、精神的に肉体的に、また人生そのものが壊れていくというのは当然のことなんです。しかもそれがこの世にいる人生だけで終わることなく、永遠に滅びることになってしまい、しかもそれが子孫にまで受け継がれていくようになるわけですね。これが霊的事実というものなんです。神様を離れて、そのたましいが死んでしまった結果、人々はこのような人生を送ることになりました。しかもこれに人間による差などは存在しません。全ての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができないわけです。

1. 人間の実態を知らないと根本的に人を助けられない。

このような人間の実態を知らないでいると、人を助けようという思いがあっても根本的に人を助けることはできないわけです。人の実態が何かわかっていないと、助ける思いがあるにしても、根本的に人を助けることなどは不可能であるということを、今日の聖書を通して改めて確認して心に刻んでいただきましょう。

1) 良かれと思いやれども

人々は良かれと思って助ける思いでいろいろな工夫をしますけれども、助けることはできません。

2) 法律、ルール優先

結局人間の実態、霊的事実による人間の実態がわかっていないと何を基準に取り上げるのかと言いますと、法律や決まった何かのルールなどを優先するしかありません。それが悪いというわけではありませんが、そこまでの限界なんですね。

3) 合格か不合格で

合格なのか不合格なのかを判断するようになります。それが世の中で行われていることであり、私たちも皆んなそういうふう生きて評価してきたのではないのでしょうか。

4) 罪の代価、懲らしめられている、災い

なのでその人に何かの問題があり、何かの過ちがあったときには、それは罪の代価であるのではない、いま懲らしめられているのだと、だから災いに見舞われているというふうに思います。もちろん間違いではありません。そこ止まりなのですね。なぜかと言いますと、1 番最初に申し上げました、霊的事実による人間の実態が何かわからないと、そうならざるを得ません。

5) 間違った答え-宗教や偶像、占い、イデオロギー、倫理、道徳

結果的に助けるつもりでガイドすることが、間違った答えを提供するしかありません。だからあなたには宗教が必要なのだよというふうに案内したり、偶像を拝み、何かお願いをしてそこから何かを得るようにした方が良いのではないのか、というふうに勧めたり、占いによってこれからの人生、今までの人生をいろいろ

と解釈したり、シャーマンに頼り、超能力的な力を引っ張り出そうとしたり、またイデオロギーなど、それを勧めることで、そのような問題だらけの人生から抜け出そうと、そこにまるで道があるかのように。個人的にも倫理、道徳等々を勧めることでより頑張るように、磨くように、そのように励ます場合もあります。でもそれが本当に答えになるものなののでしょうか。なぜそのように、間違っているのにその答えしか提供することできないのでしょうか。悪いからではありません。またそう言った内容が全く間違っていないという意味でもありませんが、霊的事実に基づいて人間の実態を本当にわかっていれば、そういうふうにはなりません。知らないから。そうならざるを得ないんですね。残念ながら神様の恵みによって教会に通うことになったのにも関わらず、礼拝を捧げているにも関わらず、霊的事実に基づいて人間の実態がわかっていないか、心から素直に認められていない場合には、同じ結果になります。だから教会に通っていながらも宗教にならざるを得ません。宗教には、いのちの力などは全く期待できないし、残念ながら教会という形、そういう形態を持っていたとしても宗教には悪霊が働くようになります。今日の聖書の箇所を見ますと、安息日にイエス様がいろいろな人に教えていらっしゃったときに、足の萎えた人がそこにいました。そこで律法学者とパリサイ人たちはイエスが安息日に、あの足の萎えた人を治すかどうか、じっと見ていたんですね。もし治したら彼らの決まりの中で安息日にそういう行為は禁じられているわけです。安息日には何もしてはいけない、というルールを誤解してそういう様々な細かい決め事を作っていたわけですね。それを破ることなので、訴えようという思いで見えていたわけです。でもイエス様の今までなさったことを見ると、可哀想な人がいたときに安息日に治すことに間違いないと予想していたわけなんですね。だから必ず訴える口実がここで見つけられるだろうと思って、彼らなりに期待してじっとイエス様の行動を見ていました。イエス様が彼らの心を見破って皆んなに言いました。安息日に善を行うことと、悪を行うことと、どちらが宜しいのか。でもそこで当たり前前に善を行うことでしょう、と皆んな思うでしょうけれども、何が善なのかを次におっしゃるわけなんです。彼らが思っているルールを守ることが善ではなくて、人間の実態が何なのか本当にわかっていれば私たちの見方は変わります。大統領を見る見方も、金持ちを見る見方も、ホームレスを見る見方も、精神的に悩んでいる人を見る見方も、精神科のお医者さんを見る見方も、全部変わります。でも私たちはクリスチャンなのに霊的事実に基づいて人間の実態を実際には認めていないのか、知らないのか、となると聖書を見ることも全てずれてしまいます。皆さんなりに良い信者になろうと頑張っても、方向は全部ずれてしまいます。何ともどかしいことでしょうか。ある意味なんと悔しいことでしょうか。悪魔は光の天使のようにも変装してクリスチャンを惑わすものなんです。頑張りなさいよ、真面目にやらないきゃ、ということととにかく霊的事実に基づいて人間の実態だけには気付かないように、あらゆるものを持って今までのいろいろな古いやぐらなどを通して、そこだけは見ることをできないように。だから性格が合わない夫婦喧嘩は止まらないんですよ。それしか見えないんです。霊的実態というのは、考えたこともないから。何か間違いがあれば間違っているから、ああいうふうになるしかない。可哀想なんだけど、仕方ないのではないかと、当たり前じゃないのか、犯罪を犯したら刑務所に入るということは仕方がないんじゃないのか。もちろんそうですよ。でもクリスチャンはそこで留まってははいけません。私たちは世の光と言われるものであるし、そういった現場に派遣されている教会なんです。でもパリサイ人たち、律法学者たちは、霊的事実、人間の実態などさっぱりわかっていないので、自分たちが決められたルールに基づいてイエス様を訴えようとしていたわけなんですね。そこでイエス様が安息日に何もしないという意味がわかっているのか。それはキリストの他には私たちに救いの道はありません、ということを忘れてもらわないために教えられた内容であって、何かをやらないというルールが問題ではないんですね。でも、そのキリストを知らないから決められたルールに縛られてそれを守るか守らないかだけが最善であり、それが合格不合格のカットラインになっていたわけなんですね。それに善を行うことと悪を行うことと、どちらが宜しいのか。何が善でしょうか。イエス様がおっしゃいました。いのちを救うことなのか、それとも失うことなのか。善を行うことは可哀想な人にご飯を差し上げる、というのも善かも知れませんが、聖書が言っている善、霊的事実に基づいて人間の実態が本当にわかって認められているのであれば、善というものは変わるんですよ。いのちを救うことが善であり、それを邪魔して反対になること、失うことを悪というわけですね。この分別もできません。霊的事実に基づいて人間の実態が何かわかっていないと、子どもが親に恨み辛みを持つ場合があります。なぜでしょうか。そんなに酷いことをされているので、しょうがないんじゃないかと思うでしょうけれども、その子は霊的事実、人間の実態がわかっていないんです。そうすると恨み辛みによって、悪霊にその考えと思いと心がとられることになるんです。その内容そのものは最もの内容なんです。やられたんだから。こんなに憎い思いを持つということは悪い良い別にして、しょうがないんじゃないか。というふうに、そこ止まり

なんです。そうすると、いや、それは健康に悪いよ、結果的に両方とも悪いから心を落ち着けましょう、宗教に行きましょう、より道徳的になりましょう、いうふうなことしかできないわけですね。そうすると形はそうにかぶれるかも知れませんが、でも大抵の場合はそれが逆にプレッシャーになっておかしくなってしまう。それが世の中というところなんですね。それでイエス様は彼らの意図を把握してその人を真ん中に立てて、それからキリストの名によって、その人の病気を治した。パリサイ人たちが訴えようとしていたのですが、訴えることができないように先手を打って、それから治されたのです。善を行うことと、いのちを救うことと、悪を行うこと、いのちを失うこと、どっちが宜しいのか。イエス様がこの病気の人を安息日に癒されたということは、いのちを救うことであり、善を行うことであり、安息日の意味と合致する内容なんです。それを解き明かしてそのようにしました。しかしパリサイ人と律法学者たちは、目が暗まっているので、そこまで行ってその証拠さえも見たにも関わらず、より怒り浸透になって、あのイエスをどうやって殺すことができるか、いうことを考えることになったと。今日の聖書の話です。よく見ていてください。今日代表的にはイエス様が行いましたけれども、それがいのちを救う側なんです。でも自分なりには律法を守って何かのルールを守り、自分なりの決まりをしっかりと守るつもり、良かれと思って頑張っているのに、いのちを無くして奪って行くような側に立つことになるんですね、それがパリサイ人と律法学者なんです。恐ろしいことなんです。なぜこうなるんでしょうか。繰り返し申し上げますけれども、聖書の知識がいっぱいあるかどうか、それも大切でしょうけれども、それ以前に霊的事実に基づいて人間の実態が何かを知らないといけません。教会に30年通って、神学校で勉強したにも関わらず、そこに目が開かれない人がほとんどなんです。そのまま学問的な内容を教えるわけなんです。となると最終的にはパリサイ人のようにならざるを得ません。世界中のキリスト教会のほとんどがパリサイ派のような教会になっているし、なりつつあります。それが敬虔で聖なる教会だというふうに勘違いしているわけです。暗闇に覆われているこの世に光の神の国をもたらし、地獄の運命にとらわれている魂をそこから引き上げるいのちの運動とは全く無縁の教会がずっと続くようになるんです。そういうことを私たちは今日の聖書の箇所を通して改めて覚えて、覚悟を新たにしていきたいと思います。

2. 人間の実態がわかればいのちを持って根本を生かせる。

かえってイエス様のことを見ますと、人間の実態、霊的な事実に基づいた人間の実態が何かわかればその人がどんな人間であれ、どんなに貧乏で、無知で、無学な、無能な人間だったとしても、いのちを持って人の根本を生かすことができるんです。いのちを持って。人間に必要なのはいのちなんだということに明確に答えを出すようになります。人の愛情以前にいのちなんです。自分の行動を正す以前にいのちなんです。なぜ教会に通っていながらもそうならないのでしょうか。なぜ他のものが先走って失敗するのでしょうか。霊的事実に基づいた人間の実態がわかっていないからです。本当に人間の実態がわかれば、自分の愛しい子どもを見る目も変わります。この子どもがとにかく良い子良い子として成長して、あまりトラブルなどを起こさないで、勉強を真面目に頑張って、良い就職をして、良い旦那さん、良い奥さんに巡り合って、というふうに思うでしょうけれども、それでよろしいのでしょうか。あなたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、生まれながら神の御怒りを受けるべき子らとして生まれたことを認めていないのではないのでしょうか。ならこの子にいのちが宿るように。大事でしょう。これは良い例えではありませんけれども、末期のがん、死ぬしかない何かの病気を抱えて、治す薬が何もない、そういう場合にそれを忘れるか隠しておいて、ご馳走をいっぱい食べたり、良い服を着たり、みんなに認められたりすればそれが幸せでしょう。クリスチャンなのに私たちは人間の実態がわかっていないか、素直に認めていないかでそういう方向にいつてしまうわけです。そこにいのちの運動などは毛頭無理で期待できないわけです。いのちの運動は長い間の訓練によって行われるものではありません。本当にいのちある者がいのちの絶対必要性に目覚めていれば、いのちの運動は起こります。

1) すべてを超越して

イエス様が今日なさったように。人間の実態がわかればいのちにこだわり、根本を生かせるようになりますけれども、すべてを超越することになります。律法やルールがどうであれ、それを無視するわけではありませんけれども、道徳や倫理、宗教がどうであれ、その人の間違いが法律的にどの程度どういうものなのか、それを全部超越して。ルールなどありません。なぜ、答えはいのちだけだから。あの人にいのちの

他にこの人が生きる道はない。私にはいのちがある。なのにこの人は汚れているんです。汚れているからだめだと思うでしょう。汚れていようが、社会的なルールがどうであろうが、この人が生かされる方法が私にしかなければ、いのちをあげることで、それがすべてを超越してなされるものなんです。いのちとは一体何でしょうか。人間の霊的実態がわかれば、いのちもその意味がわかるようになります。つまり人間の霊的実態は悪魔の奴隷なので、いのちというのはその悪魔の頭を踏み砕いて勝利することがいのちなんです。このすべてが罪によるものなので、いのちというのは人間のその罪が贖われることなんです。泥棒をしたその罪も勿論なんだろうけれども、そういう罪ではありません。自分が何かをどうしたか以前に生まれながら抱えて生まれる罪というものがあるんですね。罪を犯しているから罪人になるのではなくて、罪人として生まれたので罪を犯してしまうわけなんです。その罪が清められることをいのちといいます。このすべてが神様を離れてしまった結果なので、いのちというのは私が真面目に頑張るか、性格を変えるかではなくて、このいのちの根源である神様と出会い、神様と一緒にいること、それをいのちと言います。これが人間の方からは到底最初から不可能であり、逆方向に行くしかない罪人なので、神様にしかできません。

2) 創世記 3:15、出エジプト 3:18、イザヤ 7:14

神様がいのちを約束されました。悪魔の頭を踏み砕いて勝利するために女の子孫を約束されました。この女の子孫の方にいのちがあります。女の子孫こそキリストなんです。その女の子孫が贖いの犠牲の生贄になることで罪が清められて、贖われることになります。それがキリストなんです。そしてこのキリストがこの世に人間として来られることが約束されて、処女が身ごもって子どもを産むよ、その名をインマヌエルと言いなさい。神が人とともにおられるためにこの世に来られることになりました。その方こそキリストです。つまり、いのちは悪魔の仕業を打ち壊されて、罪が清められて、神様と一緒にいるということなんだけれども、その全てを完璧に成し遂げられる、それをなされる方をキリストと言います。なので、いのちはこのキリストのうちにあります。ほかのどこかにあるわけではありません。道端にコロコロ転がっているものではありません。

3) マタイ 16:16、ヨハネ 19:30、I ヨハネ 3:8

そして、このキリストが実際に世に来られました。主は生ける神の御子キリストです。イエス様がキリストです。そのキリストであるイエス様が十字架ですべてを完了したと宣言されて、いのちのためのすべてを完了されました。その証拠としてI ヨハネ 3:8には、神の子が現れたのは、悪魔の仕業を打ち壊すためです、と。その通りにされたわけですね。全てを完了されました。このいのちに対しては、私たち人間の方から、自分の方から何一つ触れることはできません。人間の実態が本当にわかれば、滅びることを待つしかない存在であり、神の恵みによるいのちを待つしかない。

4) ヨハネ 1:12、ローマ 10:13、14

いのちというのは、このいのちであるキリスト、イエス様を、すべてを完了されたイエス様を信じて心に受け入れるときに、その人の内側にいのちが宿ることになります。つまり、言葉を変えますと、霊的実態、その霊的問題、それが完全に終わることになります。死と罪の原理から、いのちの御霊の原理によってあなたがたは解放された。そのほかに宗教に励んでも、いくら努力して頑張っても、知識を得たとしても、修行したとしても、道徳を守ったとしても、律法の文字通りに生きたとしても、その人は助かりません。私たちのほうで何かをやって人生が変わるものではありません。それは何故そう思うのでしょうか。世の中ではそれが主流なんです。人間の霊的実態がわかっていないからそうなるしかありません。しかし、クリスチャンの私は変わらないといけません。同じ文脈で、同じ流れに乗っている、世の流れに従うことになるのではないのでしょうか。クリスチャンはその流れを変えるために召された者なんです。今日、この礼拝を通して神の恵みにより、人間の実態について、聖書が教えている通りに霊的事実に基づいて、人間の実態、自分の実態に目覚めるように。このイエスキリスト、いのちであるイエスキリストを信じて受け入れることでいのちが宿ることになり、運命の人生から解放されて、ローマ 10:13 を見ますと、

主の御名を呼び求める者は誰でも救われるのです。しかし、信じたことのない方をどうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方をどうして信じることができるでしょう。述べ伝える人がいなくて、どうして聞くことができるのでしょうか。いのちは、いのちの福音を、正しい福音を聞くことによって、聖霊の働きによって信仰が与えられ、そのイエスキリストを自分のキリストとして、救い主として、信じて心に受け入れることで得られるものなのです。だから教会が大切なんです。皆さん一人ひとりがとても大切な、貴重な存在なんです。伝える人がいなければどうして聞くことができるのでしょうか。それがいのちなんです。

5) 使徒 3:6、ヨハネ 8:11

それで、ペテロが美しの門の前に施しを求めている、生まれながら歩けない人に向かって言いました。いのちの秘密をわかっている人は、「金銀は私にはない。」本当にあるかないかではなくて、金銀ではあなたの問題は解決できないよ。生まれながら足がきかないことが問題ではなくて、あなたは神を離れて、悪魔の奴隷であり、地獄の運命にとらわれているから。そこから国家と家系と様々なバックグラウンドを通して霊的に色々な影響を受けて育ちながら、様々な心の傷などを抱えて今ここに至ることになったのです。みんな歩けないことだけを見て、施しを求めることだけを見て、かわいそうだあだこうだと言うかもしれません。ペテロは違いました。なぜ。人間の実態が何かわかるようになりました。自分の内側に、あの人に必要なイエスキリストが宿っていることに感謝し、確信を持っていたんですね。だから金銀は私にはない。私にあるものをあなたにあげよう。ナザレのイエスキリストの御名によって歩きなさい。皆さんにはペテロが足のきかない人にあげたイエスキリスト、いのちであるキリストイエスを持っていないのでしょうか。それを持つための試験やテストや何かはありません。イエスキリストを信じて受け入れた人には誰にでもキリストが宿っています。それをいのちと言います。キリストがいのちなんです。いのちが宿るといえるのは、キリストと一緒にいらっしゃるといえるのは、悪魔の仕業が打ち壊されて、罪が清められて、三位一体の神様がいつまでもともにおられるようになった、ということなんです。このいのちが宿るように、いのちを助ける、いのちを与えることを善と言います。それを邪魔するものは、それがいくら立派な理論であれ、道徳であれ、ルールであれ、悪とイエス様は仰っているんですね。ヨハネ 8:11 にも、現場で姦淫の罪を犯した女の人にみんな石を取り上げて殺そうとしました。それが正義なんです。それが人間の実態が何かわかっていないと、その人は過ちを見てとる行動なんです。悪気があってやるわけではありません。それがルールなんです。なぜでしょうか。そのルールがいないという意味ではありませんけれども、なぜそこ止まりなののでしょうか。なぜ怒りでそこ止まりなののでしょうか。人間の霊的実態を、教会に通いながら聖書を読みながらわかっていないからそうなるんです。パリサイ人たちは聖書に精通している者なんです。でも、人間の霊的実態がわかっていないまま聖書に精通すると、現場で姦淫の罪を犯した女に対して石を取り上げるわけです。それしか方法がありません。しかし、いのちであるイエス様は、彼女の、現場で姦淫の罪を犯した、その行為以前に、霊的実態がわかって、そのために来られた方だから。彼女に仰いました。「誰もいません。イエスは言われる。私もあなたを罪に定めない。」いのちを与えるわけです。誰を罪に定めることができるのでしょうか。何をもって罪に定めるのでしょうか。姦淫の罪を犯したから？泥棒をしたから？人を殴ったから？人を殺したから？なのに、教会なのに、教会でちょっとした何かが起こったから、特に牧師に何かがあればみんなつまずいて。なぜでしょう。牧師も人間だし、信徒一人ひとりも人間で。だからそれでもいいよと合理化するわけではありません。つまずいてはいけません。それは自分の問題です。たとえ人を殺した人が隣にいてもつまずくのはその人の問題なんです。人間の実態に目が眩んで悪魔に見事にやられていることなんです。皆さんがこれから伝道の運動のためにみんなで一緒に進んでいく中で色々なことを言われるときがあるでしょうけれども、これっぽっちも揺れてはいけません。その 99.9%は今日の聖書に出ているパリサイ人のような考え方、見方によることなんです。人間の実態がわかれば、このようにいのちが中心になります。しかも、もう一度覚えていてください。すべてを超越して。いのちの運動の前に引かかる、邪魔になるようなルールや法則は存在しません。なので、イエス様は 9 節にこうおっしゃいました。「あなた方に聞きますが、安息日にしてよいのは善を行うことなのか、悪を行うことなのか、いのちを救うことなのか、それとも失うことなのか、どう

ですか。」と。

6) 善と悪の基準-いのちか滅びか

つまり、これからクリスチャンの善と悪の基準というのは、いのちなのか滅びなのか、キリストなのかそうでないか、これが善と悪の基準であり、聖書は最初から最後まで全部そのように綴られています。私たちにそれを見る目がないだけです。その基準から見た時に、私たちの道徳のルールから見て到底理解できないことが褒められる場合もあるんですね。これは神様の基準なんです。人間の霊的実態が本当にわかれば、いのちより優先すべきもの、優先されるものがあるとはいけません。神様がイスラエルの民に対してものすごく怒りを覚えることがあって、そこまで怒られるものなのかと思う場面もありますよ。全部こういうことにかかっているんです。キリストを曖昧にさせるか、いのちを遠ざけることなのか。人間の霊的実態が本当にわかれば、いのち優先ではなくて、いのちの他に答えはないから。キリストの他に答えはないから。他にルールなどいないという意味とは違いますよ。でも、そのすべてを超越するようになります。何一つ、世の中にあるルールなどに縛られることなどありません。それを自由と言います。破るという意味ではありません。それを守ることと縛られることは別の話なんです。

なのでこのメッセージを聞いて、本当に真剣に素直に私自分は人間の実態を本当に知っているのか、メッセージ聞いてわかっていたとしても、心から認めているのかを素直に問いかけてみましょう。ここをクリアして通らないと次がないんですよ。なぜでしょうか。キリストオンリーになれないから。是非問いかけてみましょう。その人間の実態がどういうものかと言いますと、いのちの他の何か、凄いのなどで1ミリも助けになることができない実態なんです。キリストじゃなければ絶対にいけない実態。特に精神的に悩んでいる方々は過去の何かのでき事が鮮明に残っていて、脳細胞にそれが刻まれていて、フラッシュバックになるようになっていっているんですね。なぜでしょうか。なぜそれが残っているのでしょうか。その裏にある霊的実態について知らないからです。それが残る理由がありません。いくら酷いことであっても脳細胞から全部消さないといけません。むしろ感謝しないといけません。それによって霊的実態に目覚めてキリストに出会うことができたということで、その一つだけを残して。また同じく騙されている人が多い、彼らを助ける材料、この二つのテーマ以外は全部消さないといけません。その他のものは悪魔の仕業なんです。霊的実態が見えないように、そしてキリストが見えないように、その絵が強く濃くて大きく残るわけです。いじめられた、虐待された、暴行を受けた、裏切られた等々があまりにも鮮明に濃く残るように。悪魔の仕業なんです。その人の考えを悪霊が支配する為に、ちゃんと信者として正しく考えることができないように。考えを支配するとその人の人生、肉体、行動までも全部コントロールできるようになります、悪魔が。だから人間の実態を本当に知っているのか。問題は、それがメッセージではなくて自分がそういう存在だと。小さい時から教会に通った人、それであんまり悪ふざけをしていない人は感覚がないかも知れませんが、でも本当に素直に素直に考えると、大きな犯罪を犯した人間と自分と何が違うのでしょうか。そういう可能性は皆さんにないんでしょう。私は素直に認めます。テレビに出る捕まって刑務所に入る、皆んながあんな酷いことをやるのかと思う、そういう人が私に見えます。ただその行動に出ていないだけであって。違いますか。じゃないと私たちもパリサイ人になります。イエス様に敵対する方向に行くしかありません。これを知らずに教会生活をするパリサイ人になり、霊的な問題はそのまま残るようになります。だからいくら頑張っても良い信者になろうとしても霊的問題がそのままなので改善されません。そんなもったいないことはやめましょう。それでこれからは自分の心の中でいつも戦いましょう。何かあったときに是々非々と正しいかどうかではなくて、程度がどの程度でもなくて、いのちなのか違う法則なのか自分が本当にいのちにこだわっているのか、あるいは違う何かのルールに、法則や過去の何かにこだわって、今考えたり進んだりしているのかということを常に自分の内側でチェックしながら戦わないといけません。それで信者というのは、それをクリアして、答えのないまま彷徨っているたましいに、いのちのキリストを伝える為に、これをみことばの運動と言います。現場に派遣されている教会なんですね。だからその現場をその目でちゃんと見るようにしましょう。いのちのない霊的実態を見ようという思いで皆さんのまわりの人、現場などの人々、その実態を見ようというように、見てください。それで確認しないとメッセージがうわの空みたいになっちゃうんです、メッセージをいくら聞いていても。現場で確認しましょう、そういう思いで祈りつつ。人間の霊的実態をちゃんと見るように。いま表に現れている様々な問題を見ながら、霊的実態を確認しましょう。なるほどなるほ

ど、だから私を教会として光としてやぐらとして派遣されているんだと確認できるまで。ここに必要なのは、みことばの運動、いのちの運動なんだと。それを見た人は講壇からメッセージを聞くときに、その現場に対しての答えが得られます。皆さん一人ひとりに対してのメッセージもありますけれども、このような現場の霊的実態を見た人は、そこにみことばの運動、いのちの運動が必要なんだという思いで祈りつつ講壇のみことばを聞きますと、それが答えになり導きになります。それを祈ると、約束します。私たちが今まで願っていて、こだわっていて望んでいた全ては加えて与えられること体験するようになるでしょう。気にしなくても良いくらい。経済のことを軽んじてはいけません。でも気にしなくても良い、そういう人生にならなくてはいけません。いつまでたっていても一つひとつにこだわりつつ、細かく細かくじゃなくて、本当に神の国と義を求めることで、他は加えて与えられることで、気にしないで歩いて行く、まわりから見ているあの人の違うな、余裕あるな、なんでだろうかと思われるくらいに。それがクリスチャンの基準なんです。クリスチャンの有り様なんです。それを是非皆さんのものとして回復していきたいと思うんですね。どこにポイントがあるのか、いのちの運動なんです。いのちの運動は、いのちの絶対必要性がわかっている人を通して神様がなさることなんですね。その祝福の主人公であることを信じて、またそうなることを主の御名によって祝福します。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。今日も聖書を通して私たちに絶対必要ないのちについて教えてください、ありがとうございます。人間の霊的実態について真剣に考えて答えられるように。そして現場でそれを確認して、また自分自身を振り返って確認して、現場で確認することでいのちの運動が第一の課題になり、講壇から答えをいただいて現場でいのちの運動が行われる祝福の主人公となり、それに加えて全てが与えられることを体験する主人公になるように、一人ひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。